私たちの本国は天にある

フィリピ3章17節～4章1節
2022年11月06日
松田 基子 師

使徒パウロは、当時の人間の常識、信仰の伝統からは考えられなかった、

『神様は神の御子を人の世に生まれさせ、
人間の神様に対する罪を償わせ、贖わせられた。それがイエス・キリストの十字架であった。』

『人は誰も自分の罪を認め、悔い改め
イエス・キリストを信じ従いなさい。』

『神様はその人をイエス・キリストの十字架の
贖いの故に罪を赦し、天国に迎えて下さる』

と、宣べ伝えました。 パウロはこの事を天からの啓示によって示され、神様がイスラエルの永い歴史を通して、旧約聖書に預言して来られたのは、

『イエス・キリストが真の救い主
メシアであることを示すためであったのだ』と伝えました。

パウロはイエス・キリストこそ、生まれながらに神に背いた罪ある人間を救う事のできる、唯一のお方である事を、地中海世界に出て行って伝えました。 しかし、その様なパウロを敵視したのは、同胞のユダヤ人ばかりでなく、異教を信じる人々、外国の人達も、多くの人たちが、パウロを非難、攻撃、迫害しました。 パウロはその為に何度か投獄されてしまいました。 フィリピの信徒への手紙を書いたのは、その獄中からの事でありました。 フィリピ教会の信徒さん達は、パウロの伝道で、イエス・キリストを信じた時は、心に溢れる喜びと良い信仰を持っていました。
ただ、当時の教会は、現在のように、専任の牧師がいて、信徒を導いて行くほど整ってはいませんでした。 信徒さんたちで、 家の教会に集まり、信仰深い長老を立てて、イエス様の言葉、また、使徒の教えに従って信仰生活を守っていました。

そこに、パウロの宣教グループとは違う、ユダヤ人の巡回教師がやって来ました。 ユダヤ人は自分達が神の選びの民である事の証明として、割礼と律法を、とても重んじ、誇りとしていました。しかし、人間は律法を守る事においても、自己中心で、神様の前にではなく、人に見せるための行為となり、また、律法を、人を計るための道具にしてしまいました。 それはまた、自分も計られることでもあります。 彼らは、人前を繕い、それでも、自分では律法を守っているつもりで、自分で自分に合格点を与えて、

『自分は完全な人間だ』

と自負して、巡回教師になった人は教会を巡り歩いて教えていたのです。

フィリピ教会へも、そのような律法主義の巡回教師がやって来たのです。 彼らは律法を説きました。 しかし、どんなに人前では、律法を守っているように繕ってみても、それは神様の前には、何と罪深い事でしょう。

『イエス・キリストは、どんなに良い行いをしても、神様から合格点を貰えない人間、皆等しく、払い切れない罪を抱えており、その罪は償わなければならなかったために、罪の無い神の御子の体に、十字架の苦しみを負って人類の罪を償い、贖われたのです。』

それなのに彼らは、

『イエス・キリストを信じるだけでは救われない。
割礼を受けて、律法を守る生活をしなければ、
神様には救われない』

と教えたのです。

パウロは獄中で、フィリピの教会が、外からのその様な間違った教えに、混乱させられている事に心を痛めました。 そこでパウロは間違った教えに引き込まれない為に、長々とした説明よりも単刀直入に、フィリピの3章17節で、

「**兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者になりなさい。 また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい**」

と勧めました。 パウロはここで、なにも自分を誇って、

『自分は立派な信仰者だから
わたしを見倣いなさい』

と言っているのではありません。 パウロが求めているのは、自分への関心ではありません。
彼が求めたのは、

『生きるにも死ぬにも、イエス・キリストが
崇められること』

でありました。

『パウロに倣う事は、そのようにキリストに
従う者になりなさい』

と言うことです。

フィリピ教会の信徒さん達を、キリストに結び付けることが、パウロの本意でした。 しかし、信仰とは、一度信じたら同じ心が続くと言う訳ではありません。 イエス・キリストを信じた人々がいつの間にか違った信仰に逸れていく、人間本位の信仰に変色させて行くという危険はいつもあります。 パウロはその危険について18節に、

「**何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです**」

と言っています。 人間はどこまでも自己中心です。 信仰においても、神様に聴こうとはしません。 完全主義の傾向が強い人は、律法主義に陥り易いものです。 なぜなら、信仰に於いても頑張らなければ気が済みません。

罪は、

『お前はあんなひどい事をしたではないか。
こんな重大な罪を犯したではないか』

といつまでも良心を責めます。 責められると、何か良いことをして、償わなければ気が収まりません。 そういう人にとって、律法を守る事は、自分の罪の償いに感じられるのです。 しかし、その姿は罪の本当の重さを知らない自己中心の考えです。 人間の罪はその様な小手先のことで償えるものではありません。 人はみな罪の根を持っていて、その罪の枡目は計り得ない程重いのです。 その行き着く先は、永遠の滅びです。 そこから救うために、**イエス・キリストは人類の価値に勝る、罪無き神の御子の身体を十字架に差しだして、人類の罪を償い、贖って下さった**のです。

神様はそのことによって、人類への赦しをお与えになりました。

『神様の**人類への赦しは、ただ、この一点だけ**で、他に何かを加えること、律法を守らなければ、善い行いをしなければ、救われないと言うのではありません。』

その様に付加することは、イエス・キリストの全き救いを否定して認めない事であり、救いの道から逸れていくことです。 人間の**救いの道は、イエス・キリストの十字架によってのみ開かれ**ました。 そこで知らなければ成らないことは、

『**イエス・キリストに全信頼**し、**キリストに心結ばれ、聴き従って行く**、それは**十字架の道である**と言うことです。』

パウロはフィリピ1章29節で、

「**あなたがたには、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵として与えられているのです**」

と言っています。 また、イエス様はマタイ福音書16節24節、25節で、

「**わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る**」

と言われました。 **キリストを信じ、従う生き方**は、イエス・キリストが御自身から十字架をとり去られなかったように、**十字架を負う生き方**なのです。イエス・キリストを信じたときは、

『自分のために、イエス様が十字架に架かってくださった』

その事に心刺され、キリストに従う為には、どんな苦労も厭わないと喜んで決心した筈です。それがいつの間にか十字架に対する思いが変わってくるのです。

何故、十字架を避けようとするのでしょうか。それは勿論、

『苦しみたくない』

という本能です。 自分の為に十字架に命を献げてくださった、**イエス様の愛の深さが分からない**からであり、イエス様に**真剣に向き合う事**をせず、自分のことしか考えられなくなるからです。パウロは19節で、

「**彼らは腹を神としている**」

と言っています。 自分の腹、それは食べることです。 つまり**地上で肉体が生きる事だけしか考えられない事**です。 美味しい物を食べ、良い服を着て、快適な家に住んで、自分を楽しませ、喜ばせる事のみを追い求める自分本位の人生です。 そこから出来てくる**彼らの誇り**は、人との**比較で勝っている**こと、人々から羨望される事への関心であり、財を持つ事、地位を得ること、などなどです。 しかし、それらはその人の**人生と共に消えて行きます**。 永遠の世界から見るならば、それは価値のない、**恥ずべきものを誇っている姿**です。 彼らが何故その様なものに執着するのでしょうか。 それは彼らが自分の**地上の生、この世のことしか考えていない**からです。 彼らの人生に十字架は立っていないし、十字架を拒否する人生です。 パウロはそんな人生を、

「**彼らの行き着くところは滅びです**」

と案じています。

神様の目から御覧になると、人間の一生というのは、詩編90篇9節に詩われていますように、

「**わたしたちの生涯は御怒りに消え去り、人生はため息のように消えうせます**」

の通りです。 人生はほんの一息です。

『瞬く間に過ぎて行くのに、大切なものを見失って、どうするのですか』

と問い掛けています。 人間一人ひとりの存在は、この地上の時間で、無くなってしまうものではありません。 **死の彼方の世界がある**のです。パウロは神様がおられる永遠の世界に目を注いでいました。 20節に、

「**わたしたちの本国は天にあります**」

と希望に胸膨らませて言っています。

パウロは自分を当時、周りに沢山いた、移民の人たちに当てはめています。 当時の移民は、国の政策により本国を離れて、外国で生活しなければなりませんでした。 国の政策が達成されれば本国に帰ることができました。 しかし、そのままそこに居着いてしまう人々も少なくありませ

んでした。 移民の生活は苦労がつきものです。十字架を負う生活です。 しかし、それは何時までも続くのではありません。 やがて目的を達成すると本国に帰れるのです。 本国に帰れる確かさがあるのです。 パウロにとってその本国は、イエス・キリストが神の右に座しておられる永遠の世界、天国でした。 しかもイエス・キリストがそこから迎えに来てくださるというのです。

イエス様は、ヨハネ福音書14章1節から、
弟子達に地上での別れを告げられました。

「**わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。 行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる**」

と約束して下さいました。 イエス様は、約束を必ず守って下さいます。 パウロはそのことを信じて、3章 20 節で、

「**主イエス・キリストが救い主として来られるのを待っています**」

と心を天に向けて、喜ばしく語っています。

パウロの希望に溢れた喜びは、
『イエス様は迎えに来て下さる。』
それだけではありませんでした。 21節に、

『**キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体**（つまり、朽ちていく体）**を、 御自分の栄光ある体、**（即ち、朽ちることのない、十字架の死から霊の体に甦られた永遠の命を持つ体）**と同じ形に変えてくださるのです**』

と、キリストの再臨に心躍るのでした。 パウロはフィリピ教会の信徒さんたちも同じ信仰に立ってほしいとの願いから、4章1節に、

「**だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、このように主によってしっかりと立ちなさい**」

と勧めています。

信仰の目を何処に注いで人生を生きるのかで、わたしたちの行き着くところは決まって来ます。 信仰の目を高く上げて、人生に襲って来る様々な困難、その十字架を恐れず、逃げないでイエス・キリストが**共に、その十字架を負って下さることを信じ**て、一途に**天を見上げ**、与えられた人生を、**御国に向かって歩み抜いて**参りましょう。そして、やがての日には御国において愛する方々と共に、神様を誉め讃える喜びに溢れさせて頂きましょう。

お祈りを致します。
愛と憐れみに富んでおられる天の父なる神様

今朝は久し振りにご遺族の皆様をお招きして、召天者記念礼拝を献げさせて下さり、有難うございます。 先に召された方々は、私達が御国を見上げ、キリストに従い、十字架を厭わず、命の道を歩み、人生を全うして、天国に辿り着く事を祈り待っていてくれます。

私達が、その日を目指して道を逸れる事なく、御国に辿り着く事が出来るよう、お導き下さい。

救い主イエス・キリストのお名前によって
お祈りをいたします。

アーメン。